

本科 1 期 6 月度

解答

Z 会東大進学教室

難関国公立大・医学部英語／難関大英語 T  
京大英語／難関大英語 T（京大）  
一橋大英語／難関大英語 T（一橋大）



## 8章 総合問題8

### 問題

【1】

A.

全訳

エジプト学者はピラミッドを建設した者たちが用いた建設方法に関しては、知識に基づく推測しかできない。それぞれの建物と利用できた道具の綿密な調査と、石造建築における実現可能性の仮説、石造建築に関する現代の専門知識とで、考古学者はピラミッド、さらには一般の建設手法に関する理論を展開してきた。残念ながら、このような仮説が今日では事実だと見なされてしまっている。古王国時代やそれ以前に建設された巨大建造物のうちの1つでもエジプト学者が建てられたと主張する方法で本当に建てられたという確かな証拠がまったくないのに、である。

B.

全訳

①我々は今日、孤独を非常に恐れているので絶対に独りにならないように思える。家族や友人や映画が役に立たないとしても、なおラジオやテレビがあって空白な時間を埋めてくれる。女性は、昔は孤独を訴えたものだが、今では孤独になる必要はまったくない。我々は、ラジオやテレビの連続ドラマの主人公をそばにおいたまま家事をすることができる。これに比べれば、空想にふけっている方がまだ創造的である。②それはいくらかでも主体的な行動を要求し、精神生活を豊かにするからだ。今や我々は、孤独という空間に自分自身の夢の花を植える代わりに、絶えることのないろくに聞きもしない音楽やおしゃべりや交際によって、その空間をふさいでいる。それはただ空白を埋めるためにそこにあるにすぎない。その音が止んでしまうと、それに代わるべき内面の音楽は何もない。我々は孤独になることを改めて習得し直さなければならないのだ。1時間でも1日でも1週間でも、自分の友人や家族と別れて、孤独になるという作業を意識的に実行可能なものにすることは、今日では習得の困難な課業である。私にとっては、別離が最も難しい。たとえ短い間でも人と別れることは苦痛を免れないように思われる。それは、手足が切断されるのと同じように感じられる。それがなくなると私が人間としての機能を果たせなくなる手か足がもぎとられるのだ。③それにもかかわらず、いったんそんなことがなされてしまうと、孤独であることには信じられないほど貴重な特質があることを私は知るのだ。孤独の空白の中へ、再び生命が前よりいっそう豊かに、いきいきとして、充実したものとなって戻ってくる。まるで、別れに際して人が実際に手を1本失ったかのようなのである。それから、ヒトデのように、失った手をまた生やす。人は再び五体満足に揃った完全な体に戻る。以前は自分以外の人間達に支配されていたが、それよりもさらにずっと完全だと言えるのである。

## 【2】

### 解答

- (1) what      (2) ③ h      ④ f  
 (3) 「全訳」の下線部 ③, ④を参照。  
 (4) 素材に関しては石から青銅, 鉄, 鋼鉄への発達, エネルギーに関しては人間の力から動物の力, 風力や水力, 蒸気や石油, ロケットや原子力への発達, 機械に関しては手動の道具から動力で動く道具, 大量生産, コンピューター制御の工場への発達。  
 (5) a, e, f

### 解説

- (1) 空所③には distinguish および from の目的語になる名詞節を導くと同時に, 後続する節における主語となる語が入る。したがって, ここには先行詞を含む関係代名詞 what が入る。
- (2) ③第1段落では「人文主義」と「科学技術」のまったく対照的な関係が述べられているが, 空所④以降で「『人間であること』は技術と切り離せない」とそれまでの内容に相反することが述べられているので, 空所④には接続詞 yet (けれども, しかし) が入る。
- ④空所④以降の「道具の使用と作成, つまりもっと正確に言う道具への依存を基盤として人類を定義する人類学者がいることは驚くべきことではない」というのは, 第2段落で述べられている道具と人間の発展との深い関わりを受けた内容なので空所④には接続詞 therefore 「したがって」が入る。
- (3) ③ ◇ Humankind as we know it (我々の知っているような人間)  
 この as は「直前の名詞を限定する」接続詞で「(…する) ような」の意。as の直後に主語と be 動詞が省略されて, 過去分詞や形容詞がくることがある。  
 e.g. man as (it is) different from wild animals (野性の動物とは違った人間)  
 関係代名詞の as と区別しておこう。
- ① Language as we know it is a human invention. [接続詞]  
 ② Language, as we know, is a human invention. [関係詞]  
 ○ it = humankind  
 ◇ ~ could not have evolved or survived without tools は, without tools [= if it had not been for tools (もし道具がなかったら)] に条件が含まれている仮定法過去完了の文。  
 ○ evolve *vi.* 「発展する; 進化する」 *cf.* evolution *n.* 「進化」
- ④ ◇ we now realize that … (我々は今や…ということを認める)  
 that … 以下は realize の目的語になる名詞節。
- ◇ had they not at the same time been makers = if they had not at the same time been makers  
 仮定法の条件節の if が省略されて S V が倒置された形。not と been の間に at the same time が挿入されている点に注意。
- ◇ tools also helped make humans ~ 「道具もまた人間を~にする手助けをした」

《直訳》

○ help (to) … 「…する手助けをする」

○ make O C 「OをCにする」(O = humans)

◇ the adaptive and flexible creatures (that) they have become 「彼ら〔人間〕  
がなったような適応性のある柔軟な生き物」《直訳》

make O C のCに当たる部分。( ) の関係代名詞が省略されている。

○ adaptive *adj.* 「適応性のある」

- (4) 直後の in terms of から文末までは, technological advance (技術の進歩) の内容をさらに詳しく言い換えたものなので, この部分を整理して答えればよい。
- (5) a 「道具の使用が人間と他の動物とを区別する。」ℓ. 7 One distinction ~ tools に合致。  
b 「人間と動物の最も著しい違いは前者が言語を話すということである。」言語についての記述は本文中にない。  
c 「『人文主義者』という言葉は『科学者』や『技術者』という言葉と常に対比されてきた。」ℓ. 2 But now the “humanist” … from science and technology 参照。対比されるようになったのは現代になってから。  
d 「元来人間は道具を使うことよりも作ることにのみ興味を抱いていた。」本文に記述なし。  
e 「人文主義的な特性は技術と非常に深い関係がある。」ℓ. 5 the fact is … technology に合致。  
f 「文明の進化は, 技術の進歩と密接な関係があるとしばしば考えられている。」ℓ. 19 the march of … technological advance に合致。  
g 「人類学者は人間と動物を本質的には同じであるとみなした。」ℓ. 5 Anthropologists seeking … the genus “human” 参照。人類学者は人間と動物を区別しようとしてきたのである。

全訳

歴史におけるほとんどの期間, 「人文主義の」という言葉は人間的なことを野蛮で粗野, あるいは動物的なことから区別するのに使われてきた。しかし今や「人文主義者」は「科学者」や「技術者」と対比され, 「人文主義の」という言葉は科学技術とそれ以外のすべてのものを区別するのに用いられる。

しかし実際には「人間であること」は技術と区別できない。人類の起源を探る人類学者は, 動物と人類との区別をつけようとしようとしてきた。彼らの発見している1つの区別は人類が道具を利用したということである。㉔我々の知るような人類は, もし道具がなかったら, 多分進化することも生き残ることもできなかったであろう。道具によって人類の手の届く範囲は広がり, 筋力は拡大され, 人類はその先天的な器官をほとんどどのような環境においてもほぼ無限の働きに適合させることができるようになった。

したがって, 道具の使用と作成, もっと正確に言うと道具への依存を基盤として人類を定義する人類学者がいることは驚くべきことではない。現代の生理学や心理学や進化生物学や人類学はホモ・サピエンス(思考する者としての人間)をホモ・ファール(道具を作る者としての人類)と区別することはできないということを揃って証明している。確かに㉔我々

は今や、人間は同時に道具の作り手でなかったとしたら思考する者にもなり得なかったであろうということを認識している。人間は道具を作ったが、道具の方も人間が現在の適応力のある柔軟な生物となる手助けをした。

技術は常に人間の価値観と関連づけられてきた。人は道具そのもののためではなく目的を達成するために道具を作るのである。もっともなことだが、文明の発展はしばしば技術の発達によって計られてきた。つまり素材の点から言うと石から青銅へ、青銅から鉄へ、鉄から鋼鉄への発達、エネルギーの点から言うと人間の筋力から動物の筋力へ、風力や水力へ、蒸気や石油へ、ロケットや原子力への発達、機械の点から言うと手動の道具から動力で動く道具へ、大量生産へ、コンピューター制御の工場への発達によってである。

**注**

- ℓ. 1 ◇ the term “humanistic” [『人文主義の』という言葉]  
○ the term と humanistic は同格関係である。  
○ term *n.* 「①期間 ②条件 ③専門用語；言葉」  
○ humanistic *adj.* 「人本主義の；人間性研究の；人文主義の」  
cf. humanism *n.* = a philosophy that believes in mankind's ability to achieve happiness and fulfillment without the need for religion  
(宗教の必要なしに幸せになり目的を達成できるという人間の能力を信じる哲学)  
◇ distinguish A from B 「AをBと区別する」 (= tell A from B)
- ℓ. 2 ◇ brutal *adj.* 「①獣のように野蛮な ②残酷な ③（気候・事実などが）厳しい」  
◇ coarse [kó:rs] *adj.* 「粗雑な；きめの粗い」 (course と同音)
- ℓ. 5 ◇ the fact is that … 「事実は何ということである」  
○ that … 以下は主格補語になる名詞節である。  
◇ Anthropologists seeking the origins of humankind まだが主語。  
○ anthropologist *n.* 「(文化) 人類学者」  
○ seeking は anthropologist を修飾する [分詞の形容詞用法]。
- ℓ. 6 ◇ differentiate between A and B 「AとBの区別をする」
- ℓ. 7 ◇ genus *n.* 「(分類上の) 属；(一般に) 部類」  
◇ One distinction (that) they find と省略があり、この部分が文の主語となる。  
◇ that 以下は主格補語になる名詞節。
- ℓ. 9 ◇ amplify *vt.* 「①拡大する ②（説明・叙述などを）さらに詳述する」  
cf. ample *adj.* 「広い；十二分の」  
◇ enabling them to adjust their hereditary organic equipment to ~  
(人間がその遺伝的器官を～に適合させることができるようにして)  
○ 付帯状況を表す分詞構文 (分詞の意味上の主語は tools)。  
○ enable O to … 「Oが…することを可能にする」 (O = them = humans)  
○ adjust O to ~ 「Oを～に適合させる」  
○ hereditary *adj.* 「遺伝性の」  
○ organic *adj.* 「①有機体の ②（生物・人間の）器官の」  
○ equipment *n.* 「装備；機器」

- ℓ. 10 ◇ an almost infinite number of operations in virtually any environment  
 ○ infinite *adj.* 「無限の」 (⇔ finite)  
 ○ virtually *adv.* 「実質的には；ほとんど」
- ℓ. 11 ◇ It is not surprising, therefore, that … 「…ということはそういうわけで驚くことではない」  
 ○ it は that … を代表する形式主語である。  
 ◇ define *vt.* 「定義する」 *cf.* definition *n.*  
 ◇ on the basis of ～ 「～に基づいて；～を根拠として」
- ℓ. 12 ◇ to be more exact 「もっと厳密に言うと」  
 ○ 文中の他の部分から独立して文全体を修飾する独立不定詞。  
*e.g.* to begin with 「まず第一に」  
 to tell the truth 「実を言うと」  
 needless to say 「言うまでもないが」  
 strange to say 「奇妙なことに」
- ℓ. 13 ◇ physiology *n.* 「生理学；生理機能学」  
 ◇ combine to … 「一緒になって…する」
- ℓ. 14 ◇ that … 以下は demonstrate の目的語になる名詞節。  
 ◇ as 「～として」 《前置詞》
- ℓ. 18 ◇ One does not make a tool for the tool itself, but to achieve a goal  
 ○ not A but B 「AではなくB」  
 ○ to achieve a goal は目的を表す副詞用法の不定詞句。
- ℓ. 19 ◇ Not surprisingly 「もっともなことだが」 文頭に置かれる。《文修飾》
- ℓ. 20 ◇ in terms of ～ 「～の点から言うと」  
 ◇ (advance) from stone to bronze, (advance) from bronze to iron, … という風に意味を補って考える。

### 【3】

A.

#### 解答

- (a) (1) People do not realize the value of health until they lose it.  
 (2) I have to work no matter how tired I am. [No matter how tired I am, I have to work.]  
 (3) You may take as many dictionaries as you like.
- (b) (1) He consulted his [a] dictionary every time he came across an unfamiliar word.  
 (2) The very moment I got on the bus, it began to move.  
 (3) Whether we are rich or poor, we all have to die some day.

#### 解説

- (a) (1) 「～して初めて…」 は, it is not until ～ that …, not … until ～ で表すが, 前者を用いると, it, is, not, until の 4 語を補わなくてはならなくなるので, 後者

を用いる。

- (2) 「どんなに～でも」は, however ～, no matter how ～を用いるが, ここでは no がすでに与えられているので, matter, how を補って, no matter how ～を用いる。ところで, (×) no matter how I am tired としてしまった人はいないだろうか。これは, 基本的かつ初歩的な間違い。I am very tired の very のところに no matter how が入ったと考えて, no matter how tired 全体が I am の前にシフトするのである。no matter how ～は主節の後に置く方が頻度が高いが, 主節の前に置いても問題はない。

- (3) 「～をお持ちになって結構です」は, you may take ～。「お好きなだけ」は, 「お好きな数だけ」と考えて, as many dictionaries as you like とする。同等比較の中に組み込まれた many は, 2 番目の as 以下に具体的な数字がくる場合以外は, 原則として「多くの」の意味は持たない。

- (b) (1) 「辞書を引く」は consult one's [a] dictionary. He consulted という書き出しが与えられているので, his [a] dictionary と続ける。「…するたびに」は, whenever [every time ; each time ; any time] …を用いる。「知らない単語」は an unfamiliar word でよいが, a word one does not understand と説明的に表してもよい。「知らない単語に会う」の「出会う」は, come across, または meet がよい。

- (2) 文頭に The があるので, その後に名詞がくるのでは? と考えてみる。「the + 名詞」で「…する途端に」の意味になるのは, the moment [instant ; minute] …である。そこで, 本問の very は形容詞で, 名詞を強調する用法の very と考える。したがって, The very moment S' + V', S + V. の形にする。「バスに乗る」は「瞬間的な動作」を表しているので, take the bus ではなく, get on the bus を用いる。take the bus を用いると, 「バスを利用する」「バスに乗っていく」といった意味になる。

- (3) 文全体の主語は we である。「金持ちでも貧乏でも」は, 文頭に Whether が提示されているので, whether A or B (AであろうとBであろうと) の譲歩の形を用いる。「いつか」に対応する英語は, sometime [some time], someday [some day], one day などがあるが, ここではどれを使ってもよい。1 番自信のあるものを使おう。

B.

#### ポイント

各設問の着眼点は, (1) 関係詞の非制限用法, (2) 日本文からの主語の見きわめ, (3) 「～して初めて…」の構文および「いかに…」の構文, (4) 「…かどうか」の表現, である。いずれもよく出題されるポイントなので, じっくり復習してほしい。

#### 解答

- (1) I was disappointed to hear that our school team, which I was sure would win the championship, had lost in the first game.
- (2) I know it's not good to skip breakfast, but I have no appetite in the morning.



- (3) It was not until he caused a traffic accident that he realized how dangerous it is to drive under the influence of alcohol.
- (4) There is a lot of room for discussion about whether the death penalty should be abolished in Japan (or not).

#### 別解

- (1) I was disappointed when I heard that our school's team had lost in the first game, because I believed that it would win the tournament. / I was sure that our school team would win the championship, but it lost in the first game, so I was disappointed.
- (2) Going without breakfast is not good, certainly, but I don't feel like eating anything in the morning.
- (3) Not until he had a car accident did he learn how dangerous it is to drink and drive.
- (4) The question of whether capital punishment should be abolished in Japan leaves a lot of room for argument.

#### 解説

- (1) まず「…と聞いてがっかりした」は、'感情の原因'を表す不定詞の副詞用法を用いて、I was disappointed to hear …とする。disappointed の代わりに、discouraged も可。また、接続詞の when を使って、I was disappointed when I heard …としてもよい。「優勝すると確信していた我が校のチーム」では、関係代名詞の制限用法は使わないことに注意しよう。「我が校のチーム」は1つしかないから、制限する必要がなく、コンマを使った補足説明的な非制限用法を用いる。非制限用法には that は使えないので、which を使う。「我が校のチーム」は、our school team がよいが、our school's team も可。「確信していた」は、I was sure [certain] か、I believed を使う。「優勝する」は win the championship か win the tournament を使う。よってこの部分をまとめると our school team, which I was sure would win the championship や、our school's team, which I believed would win the tournament となる。「1回戦で負けた」は had lost in the first game となる。「負けた」は lose の他に be beaten や be defeated が使えるが、「がっかりした」より以前のことなので、時制は過去完了が望ましい。
- なお、関係詞の非制限用法を使わずに、「私は我が校のチームが1回戦で負けたと聞いてがっかりした。なぜなら優勝すると確信していたからだ。」と日本文を読み換えてから英作してもよい。また、「私は我が校のチームが優勝すると確信していたが、1回戦で負けてがっかりした。」とすることもできる。
- (2) 「～だとわかってはいますが、…」 I know ～, but …がそのままの形。他に「確かに～ではあるが…だ」と読み換え、It is true that ～, but …としたり、It is true that の代わりに certainly (確かに) のような副詞を使って表すこともできる。
- 「…(する)のはよくない」形式主語 it を使って it's not good to …とするか、動名詞を主語にして…ing is not good とする。この「よくない」は「健康によくない」ということだから、not good for one's health や bad for one's health としてもよい。「朝



食を抜く」は skip breakfast や go without breakfast とする。「食欲がわからない」は have no appetite や don't have an appetite とする他、「何も食べる気がしない」と考えて don't feel like eating anything のようにしてもよい。

- (3) 「～して初めて…する」は、It is not until ~ that … の構文に当てはめるのがよい。なお文全体が過去時制なので、be 動詞を was にすることを忘れないように。「別解」のように Not until ~ … とすることもできる。この場合は否定の副詞節を文頭に置く形になるため、主節に倒置が起きることに注意。「交通事故を起こす」は、cause a traffic accident または have a car accident。なお、動詞を have にすると、「交通事故に遭う」の意味になることもある。「…がわかる」は、realize がぴったりするが、discover, find out, learn, understand などにも使える。ただし know は「知っている；わかっている」という状態を表し、この日本文のように知らない状態から知っている状態への変化を表すのには不適である。「飲酒運転がいかに危険か」は、「飲酒運転をすることがいかに危険か」と考えると書きやすい。how を使って、how dangerous it is to … とする。「飲酒運転をする」は、drive under the influence (of alcohol) (アルコールの影響下で運転する) か、drink and drive (酒を飲んでから運転する) とする。

- (4) 「～については議論の余地が大いにある」「～の余地」は room for ~を使う。この room は不可算名詞であることに注意。「大いに」は形容詞として room を修飾すると英語らしい表現となる。a lot of, much, plenty of などを使うとよい。「議論」は discussion の他、argument も可。「～について」は about ~, as to ~など。全体では There is a lot of room for discussion about ~となる。

「日本で死刑を廃止すべきかどうか」「…すべきかどうか」という名詞節は whether を用いる。if は前置詞の目的語の場合は使えない。「死刑」は the death penalty あるいは capital punishment とする。「廃止する」は abolish, do away with などを用いる。よって全体では whether the death penalty should be abolished in Japan (or not) となる。この時 or not は付けても付けなくてもよい。

なお「別解」のように、日本文を「日本で死刑を廃止すべきかどうかという問題は議論の余地を残している。」と考えてもよい。「…かどうかという問題」は the question of whether …。of は‘同格’を表す。この時 the question の代わりに the matter も可だが、the problem は「解決すべき問題」の意味になるので不可。

#### 【4】

##### 解答

- |                 |               |  |
|-----------------|---------------|--|
| (1) since       | (2) by        | (3) only [merely ; simply ; just], but |
| (4) Such        | (5) otherwise | (6) and                                |
| (7) whether, or | (8) Now       | (9) so                                 |
| (10) but        | (11) because  | (12) that                              |
| (13) Unless     |               |  |

- (1) 「私たちは子供の頃から互いをよく知っている。」  
 ○ since … 「…以来」  
 ※通例主節に現在完了, since の導く節には過去形が用いられる。
- (2) 「君が今度彼に会う時までには, 彼はその本を読み終えているだろう。」  
 ○ by the time … 「…するまでには」  
 ※ by the time 以下は‘時’を表す副詞節なので, 単純未来の will は用いられない。
- (3) 「彼女は失敗しただけでなく, その責任を私になすりつけた。」  
 ○ not only A but (also) B 「Aばかりでなく B も」  
 ※ not only が文頭に出て疑問文の語順に倒置が起きた形。  
 ○ put the blame on ~ 「責任を~に負わせる」
- (4) 「彼の進歩は非常なものだったので先生は驚いた。」  
 S is such that … (Sはたいしたものなので…) の such が文頭に出て倒置が起きた形。  
 [= His progress was such that …]  
 [= His progress was so great that …]
- (5) 「彼は勉学に専心した。さもなければ, また失敗していただろう。」  
 ○ otherwise 「そうでなければ」 [otherwise = if he had not attended to his studies (仮定法過去完了)]  
 ○ attend to ~ 「~に専心する」
- (6) 「一生懸命に勉強しろ。そうすれば後悔しなくて済むだろう。」  
 ○ 命令文 + and ~ 「…せよ, そうすれば~」  
 cf. 命令文 + or ~ (…せよ, さもないと~)  
 Work hard, *or* you will have to regret it.  
 (一生懸命勉強しろ。さもないと後悔することになるぞ。)
- (7) 「好もうと好まざると, 君はそれをしなければならない。」  
 ○ whether … or not 「…であろうとなかろうと」
- (8) 「彼が去ってしまったので, 我々は非常に寂しい。」  
 ○ now (that) … 「今や…なので」  
 ○ miss ~ 「~がいないのを寂しく思う」
- (9) 「イギリス人がビールを味わうように, 日本人は日本酒を味わう。」  
 ○ (just) as ~, so … : ① 「(ちょうど) ~のように, (そのように) …」  
 ② 「(ちょうど) ~の時…」  
 ※②は東大の段落整序の問題で2度出ている。
- (10) 「学ぶことができないほど年を取った者はいない。→ どんなに年老いても学ぶことはできる。」  
 ○ but (否定文の後で結果を表す副詞節を導いて) 「…しないでは~ない」 = that … not ~ (文語)  
 = No man is so old *that* he may *not* learn.

- (11) 「有名な筆者に書かれているからといってよい本だとは限らない。」  
 ○ not … because ~ : ① 「～だからといって…というわけではない」  
 ② 「～だから…ない」

※ not の射程により、①②両方の意味にとることができる。

cf. She didn't come home *because* she wanted to meet her father.

① 「彼女は父親に会いたいから家に帰ってきたわけではない。」

⇒ She did not [come home because she wanted to meet her father] .

② 「彼女は父親に会いたかったので家に帰ってこなかった。」

⇒ She did not [come home] because she wanted to meet her father.

○ not necessarily … 「必ずしも…ない」

- (12) 「そんなことをするとは君はばかか。」

‘基準’を表す副詞節を導く that (…するとは；…するなんて)。

※節内にしばしば感情を表す should が伴う。主節はしばしば疑問文。

- (13) 「悪天候にはばまれなければ、私は毎日散歩する。」

○ unless … 「…でない限り」 (= except if [when] …)

※事実に反する仮定法とともに用いるのはまれ。

## 【5】

### 解答

- (1) nor, neither did, didn't either  
 (2) Hardly [Scarcely], when [before], No sooner, than, The moment [instant ; minute], Immediately [Instantly ; Directly], On, sight  
 (3) because, that  
 (4) as, that  
 (5) on, if, as [so] long as  
 (6) comes, As [So] far as

### 解説

- (1) 「彼も彼女もその小説を読んでいなかった。」

○ neither A nor B 「AもBも…ない」

○ neither + 疑問文の語順 「Sもまた…ない」

※ ‘nor + 疑問文の語順’ も同じ意味を表すが、nor は接続詞なので通例 and などの後には続かない (neither は副詞)。

○ not … either 「～もまた…ない」

- (2) 「彼は警官を見るや否や逃げ出した。」

○ at the sight of ~ 「～を見て」

米語では、Immediately [Instantly] S' + V', S + V . の形は用いず、Immediately after S' + V', S + V . を用いる。

- (3) 「人間は動物と異なるが、それは人間が話すことができるからだ。」

○ in that … 「…という点において」 (= because …)

- (4) It is written in *such* plain English *as* you can understand.

「君でも理解できるような平易な英語で書かれている。」

○ *such A as* ～ 「～のようなA」 *as* は関係代名詞または接続詞だが、本問の *as* は関係代名詞。

It is written in *such* plain English *that* you can understand it.

「平易な英語で書かれているので、君でも理解できる。」

○ *such A that* … 「非常にAなので…」 *that* は接続詞。

- (5) 「現金で支払うなら、君に私の車を売ろう。」

○ *on condition that* … 「…という条件で」

○ *if* … 「もし…ならば」

○ *as [so] long as* … 「…という条件で」

- (6) 「数学に関しては、彼に並ぶ者はいない。」

○ *when it comes to* ～ 「～という点になると」

○ *as [so] far as S is concerned* 「Sに関する限り」

○ *second to none* 「誰にも劣らない」